

木材利用に関する技術常識の更新

——富山県氷見のボカ杉(ひみ里山杉)利用の昨今を例に——

2016.12.08

富樺豊

技術を取り巻く社会背景と技術進歩とが時代とあいまって、技術常識というものが塗り替えられていくことはいうまでもない。ここでは地方の杉材（ボカ杉、最近はひみ里山杉と呼称）にスポットを当て、材の活用の昨今について技術常識を念頭に論じたい。

富山県氷見地方では、かつて（戦後期に）電柱を使途とする杉材が地区の畠に大量に植えられた。その後時代が下るとともに、電柱材需要がなくなり、今は伐採期をむかえている。富山の杉活用協議会で氷見を拠点としたグループは当該杉材の利活用を関係機関に働きかけ、総出でこれに取り組んでいた。しかし、当該杉が電柱材用であって建築構造材（以後単に構造材）にしない杉として捉えられていたためか（大量の）材の使い道がみあたらず、北陸新幹線富山駅外装材といった話も出たものの建築系からは難色が示されていた。

時を前後して一方では、地元の丸谷芳正氏（家具作家・富山大学名誉教授）は家具製作を通じて氷見の木材とかかわりを深めていた。その後、丸谷氏は街づくりならびに伝統建築にもパートナーを広げ、特に伝統建築の魅力を伝えるために低価格・セルビルドをめざして「ひみ板小屋」の開発を行った。これについては、地元の坂井修一氏（建築家・構造家）とタッグを組んで最新理論「限界耐力設計法」の適用によりボカ杉を構造材にして小屋3棟を設計した。協議会の協力も得て、当該小屋を東京ビックサイト（本年10月26・28日）のジャパンホームショーにて実際に建て展示をしたところ絶賛されたという。

以上が、ボカ杉の木造家屋への利用に至るまでの経緯である。上記の話から木利用の本質的問題としてボカ杉の冷遇を次のように考えることが出来る。ボカ杉の活用に際し学術の支援が今一つであり、建築側と林業側の相互連携がこれまでないに等しかった。分業・専門分化の所為とはいえ、今の場合、建築側がもっと対応を考えるべきではなかったのではないか。

具体的に言えば、ボカ杉が他（杉材）に比して軟材の

ために大工仕事（刻み）には熟練を要するとして職人に嫌われていた。これもあって、設計者の間でも「ボカ杉は構造材にあらず」という今なお続いている常識を作ったのである、といえよう。

しかし今は違う。熟練施工によらず耐力増を図る場合でも限界体力設計法が対処できるとあって、構造材として使わなかつたボカ杉を構造材として利用することを可能にしたのである。これは、林業と建築との連携のなせる業であり、最先端技術のなせる業でもある。

今後はボカ杉（ひみ里山杉）のますますの活用はいうに及ばないが、技術者側としては旧来の常識を自ら塗り替えるよう行動したいものである。また教育界にも言いたいことは、倫理とはそうした自浄努力や更新能力をいうのではなかろうか。ボカ杉をひとつの契機として木材や木造建築をもっと考えていきたいものである。末筆ながら、丸谷氏と坂井氏には謝意を表します。



ビックサイトにて、丸谷氏撮影



氷見の山のボカ杉